『黄冶唐三彩の考古新発見』の刊行

2005年３月、中国語版『黄冶窯考古新発見』が刊行され、本年３月、その日本語版『黄冶唐三彩の考古新発見』(奈良文化財研究所史料第73冊)を公刊しました。これは、奈良文化財研究所と中国文物研究所、河南省文物考古研究所との間で実施中の「鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び産品に関する共同研究」の研究成果中間報告書の２冊目です。

現在中国では、８ヵ所の唐三彩生産跡が知られるようになりましたが、鞏義市黄冶窯は、1957年に中国で初めて発見された唐三彩の生産跡です。場所は、隋唐の都「洛陽」の東方で、現代の省都「鄭州」との間にあり、北流して黄河に注ぐ黄冶川の両岸に窯跡が営まれています。黄冶窯は、確認されている窯跡の中で、規模が最も大きく、製品内容も豊富で、操業期間の長いことが確かめられています。その産品は中国国内に止まらず、我国を含めた東アジア、東南アジア、西アジア、アフリカ、欧州など広範に運ばれ、それぞれの多彩釉陶器生産にも強い影響を及ぼしています。日本で生産された奈良三彩もその影響下で生まれました。

平城京大安寺跡出土陶枕をはじめとして日本出土の唐三彩の研究を進める中で、その生産地での実態を研究したいとの想いが、黄冶窯の調査研究を進めてきた河南省文物考古研究所をはじめとする中国側の理解を得て、2000年度から５年間の計画でこの共同研究が始まりました。

研究は双方で協議した計画に基づき、まず、黄冶窯跡の分布調査、既出遺物の調査、文献調査、地名・伝承調査など、必要となる基礎的な悉皆調査を進めました。2002年の河南省文物考古研究所他編『鞏義黄冶唐三彩』、2003年の奈良文化財研究所編『鞏義黄冶唐三彩』(奈文研史料第61冊)はその成果の１冊目として、既出の産品を中心とした図録として刊行したものです。

2002年度からは小黄冶地区における窯跡・工房跡の発掘調査を実施し、極めて重要な知見が得られています。この発掘は、黄冶窯における最初の学術調査であり、成果は中国国内のみならず国外においても大きな反響と注目を浴びました。いち早い公表を望む声をうけて、発掘調査の概要と主だった出土遺物を一書にまとめて刊行したものが中国語版『黄冶窯考古新発見』です。

日本語版では2002・2003年度の発掘調査成果と黄冶窯の基礎研究についての中国側研究者による報告を翻訳して掲載するとともに、１冊目と同様に日本の研究者に「黄冶窯とその産品」についてのより詳しい理解を得ることを目指して、日本人向けに編集し直し、図版の個別解説を日本側研究者の観察結果を加えたものとしています。「捨てられた不良品の種類と量」「作品の製作者表示」「ドーム形三叉トチン」など幾つかのテーマで、「コラム」を加えたのも同じ意図からです。また、付録として、中国、日本における唐三彩に関する文献目録と、唐青花・唐三彩窯跡・唐三彩出土遺跡に関する文献一覧を収めるとともに、第Ⅰ期共同研究の歩みを記しています。

共同研究は現在、2005年６月に調印した協議書に基いた第Ⅱ期に入っています。大小黄冶地区の上流、水地河地区に展開する「白河窯」の発掘をおこなうとともに、黄冶窯の産品としての大型俑の発見を目指した調査を継続し、各地出土の関連資料調査を経て、日中両文版の正式報告書刊行を予定しています。

この共同研究は、当初から本研究所の文化遺産部、埋蔵文化財センター、平城宮跡発掘調査部、飛鳥藤原宮跡発掘調査部などに所属する研究者が協同でおこなう「部局を超えたプロジェクト型の共同研究」として実施してきました。今般の奈文研の組織改革では、平城、飛鳥藤原の２つの発掘調査部が統合され、本共同研究の担当が「都城発掘調査部」に移りましたが、この形は継承されます。

１冊目とともに本書が大方の叱正を得て、有意義に利用され、当該研究のより具体的な進展によって、古代都城の研究に資する一石となることを願うものです。　　(都城発掘調査部　西口 壽生)

共同研究の刊行物（上段中文版、下段日文版）